介護問題上の親子の互いの想いの葛藤

高齢者の介護の問題では、高齢となった親ご自身の想いと、介護する子の想いのずれの問題がある。

両親が元気な内はいいが、一方が逝去したり入院し、特に男親が家に一人で居ることになると、子は心配する。
まあ一人でも日常生活に支障がなければいいが、軽い認知症等が見られるようになると、なお更である。
子としては、生活拠点である今在住の地に親が来てくれるのであればいいが、高齢である親は故郷からは離れがたらないという、親子間の葛藤の問題をよく耳にする昨今である。

我がコミュニケーション論（生きる→人間関係→コミュニケーション）から観ると、高齢者が介護の問題で故郷を離れるのは、やはり自分を知る人が側に居なくなる寂しさ故でないかなあと思う。
「生きる→人間関係（人との係わり合い）」の中でこそ自己認識、自己肯定できると思うだけに、故郷から離れて子の住む土地に来て知人が少なくなるということは、その知人の中に居たご自身がいなくなること。

「人間には死は２度ある。一度は肉体的に死んだ時、もう一度は忘れ去られた時。」という言葉がある。
つまり、高齢者は故郷を離れるということは、今までの生活の地であった故郷の知人から「忘れ去られる＝死」という想いというか感覚が忍び寄るのでないだろうか。
言い換えれば、人生という長きに渡り実感してきた自分という存在が次第に削がれていくような感覚を抱くのでないだろうか。
この感覚は、各自異なる感覚の問題だけに、子であっても恐らく解ってもらえないだろうと思い、また、感覚だけにうまく表現できないこともあり、「ただ故郷を離れたくない」というわがままと受け止められるのでないだろうか。

かといって、子は子として親を側で世話したいと思うもの。
この親子の葛藤は親子である証とも云えることで、また、介護の問題ではこれがベストというものはないだけに、周りの第三者や親戚等があれこれ言おうが、親の想いを考慮しつつその状況の時々にベターと思うことをしていくしかないと思う。
ただ、子だけが介護を担うのでなく、あらゆる社会資源を活用する勇気を持ち合わせて欲しいとも思う。

我がコミュニケーション論は、年齢に関係なく、人が人として生きて行くことに伴うあらゆる側面の本質を突いていると思うのだが……。

阿部幸泰　　（2011 年 1 月 28 日　記）